岡大発ベンチャーな人紹介

多田　千香子さん

おやつ研究家・食ジャーナリスト

朝日新聞社で記者として勤務後、フリーランスのライターに転身。現在、おやつ研究家・食ジャーナリストとして活躍されている多田千香子さんに、学生時代の思い出とキャリアについて語っていただきました。

▶多田　千香子（ただ　ちかこ）
1970年　岡山県備前市生まれ
1993年　本学法学部卒業、朝日新聞社入社。
　　新潟・福山・大阪・福岡で記者・編集者として12年余り勤務
2005年　フリーランスに。渡仏
2006年　ル・コルドン・ブルー・パリ校製菓上級課程修了（ディプロム取得）
2007年　帰国。京都在住を経て現在インド在住
　　著書にパリ留学記「パリ砂糖漬けの日々」（文藝春秋）、レシピ＆おはなし「おやつ新報へ、ようこそ。」（エンターブレイン）

「反響のある面白さ」に目覚める

子どものころから、新聞記者になりたかったので、地元にあって、社会に接することが多そうな岡大法学部に進みました。典型的なバブル期の学生だったので、日々アルバイトに明け暮れていました。2年生のとき、エジプトに行ってから海外が好きになり、バックパッカーとなって世界各地を旅しました。一時はキャビンアテンダントになろうかと思ったくらいです。そんな時、学内ミニコミ誌にエジプトの旅行記を寄稿したところ、周りの人から感想をもらい、それがきっかけで「反響のある面白さ」に目覚め、改めてマスコミを志望。朝日新聞社に入社しました。

「岡大卒」は見出しになる

私も朝日新聞社で採用に関わったことがありますが、有名大学だからといって有利になることはまったくありません。大手マスコミは確かに有名大学の学生が多数受けますが、一つの大学から何人も受けるので、埋没してしまう傾向にあります。その点、岡大だと逆に目立ちます。新聞風に言えば、「見出しになる」のです。就職活動で不利に感じたことはなかったですね。

書くことを軸に

新聞記者として地方支局を中心に回り、行政などありとあらゆる分野を担当しました。記者という仕事が好きでたまらなかったのですが、採用12年目に管理職のようなポストに就いて、現場で働きたいのに管理業務を行わざるをえないというジレンマに悩み出しました。組織人である以上、やむをえないことなのですが、自分の最も得意な「書く」というスキルを生かし、フリーライターになろうと決意し、退社。「おやつ」、「旅行」、「スポーツ」という好きな3ジャンルのどれかの専門家になろう。この中で私が最も愛せるのはおやつで、ライバルも少ない。そんな理由から、「おやつ」ならば私だけにしか描けない世界を伝えられ、フリーとしてやっていけると考えて「おやつ研究家」を志しました。

多くの人をハッピーにしたい

２００５年に渡仏し、フランス料理・菓子学校のル・コルドン・ブルーに入校して、ベーシックなおやつについて勉強。課程修了後、京都に居を移して、おやつ作りのワークショップなどを行うアトリエ「おやつ新報」を設立しました。一方で、ａｓａｈｉ．ｃｏｍでコラムを連載し、パリ留学記・おやつのレシピ＆おはなし集の2冊を出版しました。ちなみに京都に引っ越したのは、パリと京都はどちらも大好きな街であることに加え、おやつで有名で、「パリから京都へ」というのがおやつ研究家として見出しになると考えたからです。

おやつは人と会うためのツールという側面があって、おやつを中心にさまざまな人とのご縁が広がっていくのが面白いですね。現在、インドのデリーに住んでいるのですが、じつはこれも、おやつがとりもってくれた縁によるものです。

好奇心旺盛なので、今後、いろいろなことをすると思いますが、「おやつを作って文章を書く」という軸はずらすつもりはありません。私らしい表現方法で、心を和ますおやつの良さを少しでも多くの人に伝えて、ハッピーにしたいと考えています。

時には「消去法」を

私が常に意識してきたのは、「人生は有限」ということです。迷っている暇なんてないのです。思いたったらGO!です。それでも、自分のやりたいことが分からない人は、私が「おやつ研究家」を志したときのように、「自分の売りにならないもの」や「やりたくないもの」を消して残ったものを選ぶという「消去法」もありだと思います。とにかく、学生は失うものがありませんから、どんどんチャレンジしていって欲しいですね。